

Title	時間概念的語言範疇化：論台灣華語的非現實體標記「會」
Author(s)	簡, 靖倫
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/55706
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論 文 內 容 の 要 旨

氏 名 (簡 靖 倫)	
論文題名	時間概念的語言範疇化 · 論台灣華語的非現實體標記「會」·
<p>論文内容の要旨</p> <p>過往文獻中多僅將華語偏好使用「會」的現象視為閩南語的影響，而未深入探討造成該現象的原因，故本論文目的為探討華語中「會」大量使用的成因及其使用情形。</p> <p>從類型學的觀點看來，時式概念的理解方式可分為兩大類型，「過去式·非過去式」與「未來·非未來」。一般提到時式都將其區分過去式、現在式及未來式三種，但是多數語言對時間概念的理解（語言表達方式）是採用二元時制系統（binary tense systems）。而且這種二元時制系統並非 A 與 B 對立的概念，而是重視 A，其他不重視的非 A 皆歸類於 B。所以「過去式·非過去式（past-nonpast）」便是重視「過去式」，「過去式」必需使用標記與「非過去式」做出區別，而非過去式中的「現在式」及「未來式」往往不使用標記，或者乾脆使用相同標記一併處理。另一種「現實·非現實（realis-irrealis）」語言則是重「非現實」，而輕「現實」（過去式與現在式）事件。</p> <p>本文的考察對象即為時間關係語系統截然不同的「過去式·非過去式」的普通話與「現實·非現實」系統的華語。所以看似相同的「未來」的時式標記「會」，在華語中是非現實體標記；普通話的「會」則是隸屬非過去式下位範疇之一的未來時式標記。藉由本文考察證明，對於時間概念理解的差異導致在兩語言中的「會」在本質上有所不同。</p> <p>這點可以從「我父親中午去釣魚」這個未完小句的時式解讀方式一窺究竟。華語屬於「現實·非現實」語言，所以當非現實句要成立時，必然伴隨非現實體標記。自然，如「我父親中午去釣魚」一類不具任何時式標準記的表現，會優先理解為「已然」。普通話則相反，「過去式·非過去式」語言重視標記「過去式」，所以不具時式標準記的「我父親中午去釣魚」這句話會優先被理解為「未然」。對未然事件的理解與重視程度不同，自然也就影響了「會」標記的使用策略。另外，除了「未然」事件必須使用非現實體標記外，華語甚至還偏好於「現在」及「已然」的事件中使用「會」，並藉由事件的「非現實」化，可以表達豐富的情態義。</p>	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (簡 靖 倫)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	言語文化研究科教授 杉 村 博 文
	副 査	言語文化研究科教授 古 川 裕
	副 査	言語文化研究科准教授 林 初 梅
	副 査	言語文化研究科特任准教授 金 昌 吉
	副 査	言語文化研究科特任准教授 張 恒 悦

論文審査結果の要旨

漢語（漢民族の言語）の北方バージョンをベースとし、強力な規範化を経て創り上げられた言語が二つの地域に根づいた。一つは中国大陸、一つは台湾である。本論文（使用言語：中国語）は前者を「普通話」と呼び、後者を「華語」と呼ぶ。さらに、考察対象として、「普通話」には北方地域、特に北京地区の言語を採り、「華語」には台湾の20歳～40歳の世代が使用する言語を採った。

本論文は、「普通話」と「華語」におけるグラウンディングの様態を、時間表現の範疇化という視点から対照し、前者には「過去 非過去（現在＋未来）」という対立が成立しており、後者には、台湾における言語接触（主として閩南語との接触）の結果、「現実（過去＋現在） 非現実（未来）」という対立が成立していると主張する。

上記の対立は、「我父親中午去釣魚（私-父親-昼-行く-釣る-魚）」のような、時制もアスペクトもマークされていない表現を提示された場合、「普通話」話者は「非過去（未来）」の読みを優先し、「華語」話者は「現実（過去）」の読みを優先するという点に一斑が窺われ、さらに典型的には、「會」という「未来における発生可能性を予測する」助動詞の両言語における使用状況に現れている。「華語」における「會」の意味拡張の多様性と使用頻度の高さは、「普通話」からは想像すらできない程度に達しており、この現象は、上記のような視点を導入しなければ十全な説明は不可能であるとするのが本論文の主張であり、従来ややもすれば「普通話」の視点に立って、強調や修辭という表現で糊塗されてきた言語現象を言語学の土俵に引き戻し、大きな修正を求める主張である。

本論文は、先行研究の検討、日本語を原文とする「普通話」訳書と「華語」訳書の対照、母語話者への聞き取り調査、「普通話」学習者の誤用例調査（「普通話」から見れば誤用であるが「華語」から見れば正しい「誤用例」を調査、HSK 動態コーパスを利用）等の綿密な検証を経て、上記主張を立証することに基本的に成功している。

本論文は、論証の明確性、翻訳資料の利用方法、方言資料の正確性になお検討を要する箇所を残すものの、「普通話」と「華語」のグラウンディング研究において、時間表現に限られてはいるが、旧説を越えた新規性に富む記述となっており、今後この分野における研究を活性化させる文献となることが期待できる。

上記の評価に基づき、本審査委員会は、本論文が博士号（言語文化学）を授与するに相応しい業績であると判定した。